

# オオクチバスの共食いに関する研究（オオクチバスが優占する内湖）

佐野聡哉・臼杵崇広・田口貴史

## 1. 目的

駆除によってオオクチバス（以下バス）成魚を減少させた水域において、バスの当歳魚が急増する現象（リバウンド現象）が見られている。この現象の原因解明を試みる上で、バスの初期減耗要因の把握は必須である。昨年の研究は、ブルーギル（以下ギル）がいないダム湖において、共食いがバスの重大な初期減耗要因となることを示した。今年度はギルが多数生息する内湖におけるバスの共食いの状況について調査した。

## 2. 方法

大津市にある近江舞子沼（7.8ha）を調査水域とした。この水域はバスとギルが優占しており、在来魚は若干のフナとヨシノボリのみ目視確認された。

この水域において、平成28年5月26日と6月21日に、岸から釣りによりバスを捕獲した。餌には生きたスジエビを用いた。捕獲したバスは10%ホルマリン水溶液で直ちに固定して持ち帰り、体長および体重を測定した後に解剖して胃の内容物を調べた。なお、胃の中から出現したスジエビについては、釣り餌だと判断して結果から除外した。胃内容物の餌料出現率(%F)を次式により求めた。

$$(\%F) = (\text{ある生物を捕食していた個体数}) / (\text{総個体数} - \text{空胃個体数}) \times 10^2$$

## 3. 結果

両日とも、岸近くの水草周辺を泳ぐ多数のバス当歳魚と、それらを追いかける1歳以上のバスが岸から目視で確認された。

結果を表1に示す。5月は、32尾（標準体長（以下SL）95.13~165.22mm、平均119.1mm）のバスを捕獲し、その内8尾の胃内からバスの当歳魚を検出した。空胃は11尾であった。

6月は、30尾（SL112.64~324mm、平均147.9mm）のバスを捕獲し、その内6尾の胃内からバス当歳魚を検出した。空胃は8尾であった。両日とも、バスの胃内からギルは検出されなかった。胃から取り出したバス当歳魚のSLは5月が15mm程度、6月が15~26mmであった。

以上の結果から、ギルが多数生息する水域でも、バスの当歳魚は多数共食いされており、それらはバスの初期減耗の重大な要因になりうると考えられた。このことは、バス1歳以上魚の減少や他魚種の増加などによって共食いによる初期減耗が軽減されれば、バスの当歳魚が急増する（リバウンド現象が起こる）可能性を示唆している。

表 近江舞子沼で捕獲したバスの胃内容物  
餌料出現頻度

	5月	6月	計	
供試魚	供試魚個体数	32	30	62
	平均SL(mm)	119.1	147.9	133.0
	標準偏差	15.0	51.7	40.0
	空胃個体数	11	8	19
	空胃率(%)	34.4	26.7	30.6
胃内容物	<b>バス</b>	<b>38.1</b>	<b>27.3</b>	<b>32.6</b>
	ヨシノボリ	4.8	4.5	4.7
	ウキゴリ	—	4.5	2.3
	フナ	—	4.5	2.3
	ハス	4.8	—	2.3
	<b>出現率(%F)</b>	<b>28.6</b>	<b>59.1</b>	<b>44.2</b>
	魚(魚種不明)	19.0	4.5	11.6
	ザリガニ	19.0	—	9.3
	昆虫	—	4.5	2.3
	オタマジャクシ	—	4.5	2.3
甲殻類プランクトン	—	4.5	2.3	



写真 バス1歳以上魚の胃内から検出されたバス当歳魚